

## 原著論文 近世における石見銀山の森林利用と景観

|     |                                                                                 |
|-----|---------------------------------------------------------------------------------|
| 著者  | 黒田 乃生, 井上 雅仁, 仲野 義文                                                             |
| 雑誌名 | 世界遺産学研究                                                                         |
| 巻   | 6                                                                               |
| ページ | 19-28                                                                           |
| 発行年 | 2019-03                                                                         |
| URL | <a href="http://doi.org/10.15068/00156117">http://doi.org/10.15068/00156117</a> |

## 近世における石見銀山の森林利用と景観

黒田 乃生<sup>1)</sup>・井上 雅仁<sup>2)</sup>・仲野 義文<sup>3)</sup>

所属 1) 筑波大学芸術系

2) 島根県立三瓶自然館・公益財団法人しまね自然と環境財団

3) 石見銀山資料館

Forest landscape in Iwami Ginzan Silver Mine Area  
during the Edo Period

Nobu KURODA<sup>1)</sup>, Masahito INOUE<sup>2)</sup>, Yoshifumi NAKANO<sup>3)</sup>.

1) Faculty of Art and Design, University of Tsukuba

2) The Shimane Nature Museum of Mt. Sanbe, Shimane Nature and Environment  
Foundation

3) Iwami Silvermine Museum

和文要旨：森林は世界遺産「石見銀山遺跡とその文化的景観」の価値を構成する重要な要素である。本研究は銀山に植物資源を供給していた石見銀山領を対象に既往文献等から近世における植物の利用および森林の景観を概観する。近世では銀山柵内はマツ、タケ、周辺地域はクリと炭焼き用の広葉樹、マツなどが利用されていた。石見銀山領は過半が草地で、銀山の周辺は薪炭や資材供給のため沿岸部の松を除くと高木が密集するような森林はほとんどなかったことが明らかになった。現在の石見銀山周辺の森林は竹の繁茂や荒廃などの課題を抱えている。銀の採掘や製錬に欠かせない植物資源の利用と、当時の森林を含む石見銀山の景観を伝え、適切に森林を管理する必要がある。

キーワード：鉱山 御囲村 御立山

Abstract: Iwami Ginzan Silver Mine and its Cultural Landscape was inscribed on the world heritage list in 2007. In the nomination dossier, it is said that forest plants are important element which explain the value of the landscape. But detail of the plant use has not been clarified yet. The aim of this research is to figure out the plant use around the Iwami ginzan area and clarify the value of the forest. Within the area of Sakunouchi; Mining area, Pine and Bamboo were grown and Chestnut and broad-leaved trees are forested around the Mining area. Especially, enormous amount of chestnut timber, which are used for drift/pit props, were assembled into the mining area. More than half of the area were grassland and there were several conservation forests along the coast. Today bamboo get a disease and forest are desolated. Revaluation and appropriate management of forest are necessary.

Keywords: Mine site, Direct control villages, Government forest.

## 1. はじめに

### (1) 研究の背景と目的

「石見銀山遺跡とその文化的景観」は2007年に世界遺産リストに登録された。石見銀山では16世紀から17世紀にかけて銀が大量に採掘、製錬され、東アジア、ヨーロッパの交易に使われた。銀生産に関わるさまざまな痕跡は現在では森林に覆われ、いわゆる「化石景観 (relict landscape)」となっている。一方、銀の積み出し港や役人が居住した集落には現在も人が生活しており、これらの採掘と製錬の遺跡、集落、運搬した街道、16世紀の山城の跡などの構成資産として登録されている(文化庁 online)。構成資産をとりまく石見銀山遺跡の森林は世界遺産の価値を表す重要な要素である。世界遺産の推薦書には「銀鉱山とその周囲の山間地域には、アラカシ・シラカシ・アカマツ・コナラ・ミズナラなどから成る二次林が形成されている。これらの樹林は、19世紀まで銀山の生産・生活用薪炭材を供給した森林が豊かに伝えられたものである。(略)これらの山林は、銀鉱山における文化的景観の重要な要素となっている。」と述べられている(日本 2006, 11)。

しかし、世界に影響を与えるほどの産出量があった石見銀山において植物資源を利用した採掘や製錬が行われていたとすれば、推薦書に記載されたように「薪炭林が豊かに伝えられた」とは考え難い。植物資源は枯渇し森林はむしろはげ山に近かったのではないかと推測される。石見銀山地域では森林の変化を明らかにし(ICOMOS 2007, 53)、それをふまえた管理計画の策定が課題となっている。さらに、世界遺産地域外に広がる石見銀山に深い関係がある森林として、最盛期の近世に幕府の支配が及んだとされる石見銀山領があり、植生およびその位置関係を示す森林景観と植物資源の利用を把握する必要がある。石見銀山の森林や植生の歴史に関する仮説に対して断片的な資料をもとにした研究が見られるものの、銀山領全体を対象に分布を地図上に表した研究はない。そこで本研究では石見銀山領の森林の利用と景観を明らかにすることを目的とする。

石見銀山地域の植生の歴史は銀山が発見される以前、銀の採掘が行われていた中世末から近世、採掘が終了した近代以降におおまかに区分することができる。近世は銀の採掘が最盛期を迎え、最も森林利用が盛んだったと考えられる。そこで本研究は近世を対象に既往文献等から植物の利用および森林景観を明らかにする。

### (2) 研究の方法

研究方法は文献調査およびGISによる森林の種類分布図作成である。文献調査は森林利用に関する詳しい記述がある文献(仲野 2005, 2009)をはじめ、島根県立図書館所蔵の県史、林政史、ほか郷土資料で石見銀山に係るもの、CiNii(NII 学術情報ナビゲータ)において「石見銀山」をキーワードに検索した文献、島根県教育委員会が発行する石見銀山歴史文献報告書、石見銀山遺跡発掘調査概要から近世以前の森林に関連する記載があるものを抽出した。

それらの中から、近世の石見銀山領の森林景観がわかるものとして「郷土石見」に掲載された「元禄十一年石見銀山料村々覚書」を図の作成に用いた。管見の限り石見銀山領のほぼ全体にわたる森林景観を示す唯一の資料である。村ごとの草地、松林など大まかな森林の様子が記録されており、森林景観を把握するために有効であると判断した<sup>注1)</sup>。本資料の村名を現在の字名と照合し、統合された字は温泉津町史、大田市誌で確認した。また、御立山の森林景観は仲野の文献から同様に村名を照合して把握した(仲野 2009)。

### (3) 本研究の対象地域

本研究は銀鉱山を中心に採掘や製錬に使用する植物資源を供給していた江戸幕府の直轄領である石見銀山領を対象とする。「石見銀山領」は銀を採掘していた「柵内」および周辺の153ヶ村である(図-1 仲野 2007)。このうち、145ヶ村が「元禄十一年石見銀山料村々覚書」に記載されているが、残り8ヶ村については不明である。石見銀山領は幕府が管理する御立山と百姓山に分けられる。さらに時代に応じて、石見銀山領には17世紀末に特に資材の調達を請け負う「御囲村」32ヶ村が、18世紀後半に「炭方六ヶ村」が設定された(表-1, 図-2)。御囲村は現在の世界遺産地域を含み内陸に向かって広がり、御立村には世界遺産に登録された地域は含まれておらず内陸に分布している。

## (2) 近世における石見銀山の森林の概要

石見銀山における森林資源に関連する記録を表-1に示す。項目の「柵内」は世界遺産の構成資産名が「銀山柵内」で、面積約320haの銀鉱山跡(日本2006,15)、「周辺」は石見銀山領を含む出来事である。花粉分析の結果によると、銀山が発見される以前の坑道がある仙ノ山周辺はアカガシ亜属中心の植生だったが、銀の開発が始まりマツと草本に変化したとされている(井上2011)。1533(天文2)年に始まった灰吹法をはじめ(島根県1965,2)、銀の採掘と製錬には多くの植物資源が使用された。1600(慶長5)年江戸幕府の直轄になり必要な炭は近隣の村に役が課され、厳しい課役があったことが文書からわかる。しかし、すでに1605(慶長10)年の文書では遠方から松や小枝、炭を運んでいることが記されており、17世紀には銀山地域の森林資源が枯渇していた。銀山ではこうした資源を確保するために江戸初期に指定された御立山のほかに17世紀末に銀山近郷の32ヶ村を御囲村として設定した。

## 2. 銀山で利用した植物資源

### (1) 坑道の四ツ留と切張(クリ)

銀山では銀の採掘から製錬までの過程でさまざまな植物資源を利用していた(表-2)(仲野2009,129-146)。銀山要集・銀山旧記にはこうした利用に関する記載がある(島根県1965,1-66)。これによると、坑道である間歩の入口「四ツ留」にはクリの丸太を用いた。また、「留山」といって、坑道内の地盤が軟弱なカ所には周囲が1尺(30cm,直径約10cm)のクリの丸太を鳥居のように左右と上に立て、さらにクリの割り木を間に入れて土石で固め落盤を防止したとされている。留山に使用する材を「切張」と言い、水に強いクリが用いられた(島根県1965,9)。文化2(1805)年の文書には間歩の修復に留木が151駄、そのうち九本持が125駄8歩7厘、六本持が25駄3歩3厘となっている。つまり幹周り約30cmの木材が1,130本、約45cmの木材が152本、合計1,300本あまりのクリ丸太が必要だったことになる(表-3)(島根県1965,42)。銀山全体で坑道の開設や維持に非常に多くの木材が使われたのである(仲野2005)。最も多く必要だったクリは明和2(1765)年に銀山で植林に関する文書が出されている(仲野2009,145)。この時期にはすでに木材調達のための御囲村においても雑木、クリを伐りつくしてしまっていた。そこで留山の修理のために銀山の荒地に植林をするよう指示したと考えられる。植林は栃畑16町、仙ノ山30町あまり、合計50町(約50ha)に及んだ。また、明和6(1769)年には御陣屋の後山の21,700株をはじめ、西本坊上ミ、蔵泉寺口前にもクリの苗が植えられた(仲野2009,145)。

### (2) 銀の製錬(コナラ、ツバキ、カシ)

銀を製錬する過程でも多くの植物資源が用いられた。もっとも重要なのは炭である。炭には軟らかい「くろ炭」と堅い「吉舎炭」があった。吉舎炭は「白炭」ともいわれ、材料は「槇と言木者関東ニて小ならと申木の類なり」としている(仲野2009,130)。島根県の別の地域では炭にはナラと雑木、カシを使用していたこと(島根県文化財愛護協会1998,26-28)、潜在植生ではカシ類があることなどからも針葉樹のマキではなく、コナラなどの広葉樹が用いられていたと考えられる。現在の夏緑広葉樹林にはコナラ、クリ、ノグルミ、ヤマザクラが出現しており(井上2010)、「槇」がコナラであった可能性は高い。

炭以外の燃料には「焼木」と「渡木」がある。焼木は鉱石に含まれる硫黄を取り去るために必要な大量の薪のことである。800貫(3トン)の銀鉱石に対して400貫(1.5トン)の焼木が必要だったとされる(仲野2009,130-131)。焼木については「雑木」とされ特定の樹種の記述はない。

渡木は灰吹に用いる。灰吹の工程では炭のほかに海辺で塩を焼くときに使用した上質な松葉の灰、鉛を溶かすときには3尺(約90cm)の木材を2本渡した上に濡れたムシロを乗せ火気が飛ばないようにしたという。銀山要集には、「槇椿樫」とあり(島根県1965,38)、慶応2年(1866)年の文書によれば渡木は槇とされている(仲野2009,141)。ここでいう「槇」も炭と同様にナラであった可能性が高い。つまり、カシ、ナラ、ツバキなどの広葉樹が渡木として用いられたと考えられる。

表－１ 植生に関する記録

| 西暦        | 元号      | 植生と石見銀山に関する記録                                                             | 柵内 | 周辺 | 文献  |
|-----------|---------|---------------------------------------------------------------------------|----|----|-----|
| 古代から中世    |         | アカガシ垂属中心の植生（仙ノ山周辺、花粉分析）                                                   | ●  |    | a   |
| 1309      | 延慶2     | 大内弘幸が発見（伝承）                                                               |    |    | b   |
| 中世末から近世   |         | マツ属＋イネ科、ヨモギ属（仙ノ山周辺、花粉分析）                                                  | ●  |    | a   |
| 1526      | 大永6     | 神屋寿禎による石見銀山の開発開始                                                          |    |    | b   |
| 1533      | 天文2     | 灰吹法による精錬開始                                                                |    |    | b   |
| 1562      | 永禄5     | 毛利元就による直轄支配                                                               |    |    | b   |
| 1600      | 慶長5     | 銀山内への炭に役に課される（石見国銀山諸役請納書写、吉岡家文書）                                          | ●  |    | c   |
| 1600      | 慶長5     | 徳川氏が領有                                                                    |    |    | b   |
|           |         | 江戸幕府が御立山（官有林）設定                                                           | ●  | ●  | d   |
| 1604      | 慶長9     | 大久保長安が近郷の山林を調べさせる書状。千野所に灰吹屋が建設され、そこで使用する炭を調達するため翌年の重田家文書につながる             |    | ●  | c   |
| 1605      | 慶長10    | 3月から12月までに炭10115俵、山松247俵、小枝4471ふしを益田、三隅から温泉津に運ぶ                           |    | ●  | e   |
| 1641      | 寛永18    | 銀山に珙松植樹                                                                   | ●  |    | b   |
| 1638-1641 | 寛永15-18 | 惣廻り二里半四十八間 並木二千本程有（杉田九郎兵衛殿御支配之節、植置かれ候也、）                                  |    |    | f   |
| 1690頃     | 元禄期     | 元禄年間に領内に銀山御囲村32ヶ村を設定                                                      |    |    | b   |
| 1699      | 元禄11    | 石見銀山領村々覚書                                                                 |    |    | h,i |
| 1701      | 元禄13    | （佐見赤山神社の修理のため）古城山から松の大木13本を寄進                                             |    |    | f   |
| 17C.以降    |         | 「古来から銀山境内では炭焼禁止」の記述                                                       |    |    | h   |
| 1738      | 元文3     | 温泉津村御立山「御林改」松木3957本（目通1尺より1丈2尺まで、長さ1間より9間まで）                              |    | ●  | j   |
| 1740      | 元文5     | 石見屋徳兵衛の願書に御立山の立木の枯渴の記載（銀山覚書、龍善徳氏所蔵）                                       |    | ●  | d   |
|           | 宝暦明和年間  | 多くの御立山で立木が枯渴                                                              | ●  | ●  | h   |
| 1764頃     | 明和年間    | 忍原村、別府村、惣森村、湯抱村、志君村、小松地村を炭方六ヶ村に指定                                         |    | ●  | d   |
| 1765      | 明和2     | 栃畑、仙ノ山なかれ谷の50町歩にクリ苗木を植樹                                                   | ●  |    | a,i |
| 1769      | 明和6     | 後陣屋後山に21,700株、西本坊上ミ、蔵泉寺口前などにクリ苗木植樹                                        | ●  |    | a,i |
| 1854      | 嘉永7     | 飯原坂の上から温泉津・小浜の瓦場まで、松割木一束一五五文で出荷することを条件に、茂右衛門所有の山林伐採を認める文書（温泉津の登窯の燃料として利用） |    | ●  | k   |

●:石見銀山に関する森林景観以外の主な出来事

- a. 井上雅仁（2011）：石見銀山と周辺地域における近世の植生と土地利用：石見銀山遺跡テーマ別研究報告書1：島根県教育委員会発行、62-68
- b. 銀山要集・銀山日記（島根県（1965））：新修島根県史史料篇3近世下、1-67
- c. 吉岡家文書（村上直ほか（1978））：江戸幕府石見銀山史料、97-100
- d. 仲野義文（2009）：銀山社会の解明：清文堂、129-146（石見銀山要集、山中家文書、ほか）
- e. 温泉津町小浜重田家文書「ミサミ ます田ヨリ参御炭請取帳」（温泉津町誌編さん委員会編（1995）：温泉津町誌中巻、80）
- f. 島根県（1965）：新修島根県史 史料篇3近世下：報光社、63-65
- g. 仲野義文（2007）：石見銀山とたたら製鉄を支えた里山の環境歴史学：全国雑木林会議石見銀山大会大会報告、9-25
- h. 高橋家文書（時代根拠は推薦書[http://bunka.nii.ac.jp/suisensyo/iwamiginzan/iwamiginzan\\_7.pdf](http://bunka.nii.ac.jp/suisensyo/iwamiginzan/iwamiginzan_7.pdf)）（佐竹昭（2012）：近世瀬戸内の環境史：吉川弘文館、140-143）
- i. 仲野義文（2005A）：環境の視点から見た石見銀山：石見銀山遺跡調査ノート4、13-18
- j. 多田家文書（温泉津町誌編さん委員会編（1995）：温泉津町誌中巻、235、同（1996）：温泉津町誌別巻、92-93）
- k. 大屋家文書（温泉津町誌編さん委員会編（1994）：温泉津町誌上巻、326）

表－２ 銀の採掘・製錬に用いられた植物資源

|    | 場所・用途  | 名称                 | 樹種               |
|----|--------|--------------------|------------------|
| 採掘 | 坑道     | 四留・留山（切張）・階段       | クリ               |
|    | 換気・水抜き | 種                  | タケ、その他           |
|    | 鉱夫関係   | 足なか、松入れ<br>着物、螺灯の芯 | 稲わら<br>木綿        |
| 製錬 | 選鉱     | えぶ                 | タケ               |
|    | 灰吹など   | 吉舎炭                | コナラなど            |
|    |        | 渡木<br>焼木           | コナラ、ツバキ、カシ<br>雑木 |

銀山要集・銀山日記（島根県 1965, 1-67）

表－3 長さ5尺7寸（172cm）のクリ丸太一駄の本数と太さ

|            | 一駄 | 3本持ち   | 6本持ち    | 9本持ち     | 12本持ち  |       |
|------------|----|--------|---------|----------|--------|-------|
|            | 太さ | 3尺まわり  | 1尺5寸まわり | 1尺まわり    | 7寸5分   |       |
|            |    | 90.9cm | 45.5 cm | 30.3 cm  | 22.7cm |       |
| 文化2（1805）年 | 駄  | -      | 25駄3歩3厘 | 125駄8歩7厘 | -      | 合計    |
| 間歩の修復      | 本数 | -      | 1,133   | 152      | -      | 1,285 |

銀山要集・銀山旧記（島根県 1965, 42）

そのほか銀山要集・銀山旧記に描かれた道具はほとんどが植物材料でできている。選鉱に用いる「えぶ」と呼ばれるザルにはタケが使われた。灰吹に用いた吹子，砕いた鉱石をより分ける工程で用いられるゆり盆，桶なども木製であるが樹種の記載はない。

### 3. 石見銀山領の森林景観

#### （1）銀山柵内と垣松

16世紀前半から20世紀前半まで操業が続けられた銀鉱山遺跡の本体は，江戸時代初めに柵で囲まれていたことから柵内と呼ばれている（図－1，島根県 online）。柵列は近世のはじめから約40年間維持されたが，費用がかさむため1641（寛永18）年に垣松と呼ばれるマツに置き換わったとされている。杉田九郎兵衛が代官の時代に二千本とも三千本ともいわれるマツが植えられた<sup>注2)</sup>。若槻は垣松が植えられたのは周囲全てではなく，そのうち一部であろうと指摘している（若槻 2014）。

1701（元禄13）年には佐毘売山神社の修理のため古城山からマツの大木13本を寄進したという記述がある（島根県 1965, 63-64）。山吹城がある要害山について，「銀山古城山」という文書には，御林帳にも記載されていないマツが約270本あり，古くから間歩の四ツ留や銀山町の橋木として供出してきたこと，享保13（1728）年海上弥兵衛が代官の時代に，御林帳に記載されたのちも同様に供出をしているがそれが難しくなっていると書かれている（島根県教育委員会 2015）。井上は植生がわかる絵図を読み解き整理した（井上 2011, 仲野 2007）。これによると，1500年代から1800年代までの5種類の絵図のうち4種類で山吹城周辺にマツまたは針葉樹の絵が見られることがわかった。以上のことから，垣松が柵のかわりに並木を形成していた場所は特定できないが，少なくとも柵内の古城と呼ばれる山吹城周辺にはマツが多くあったと考えられる。

#### （2）石見銀山領（図－2）

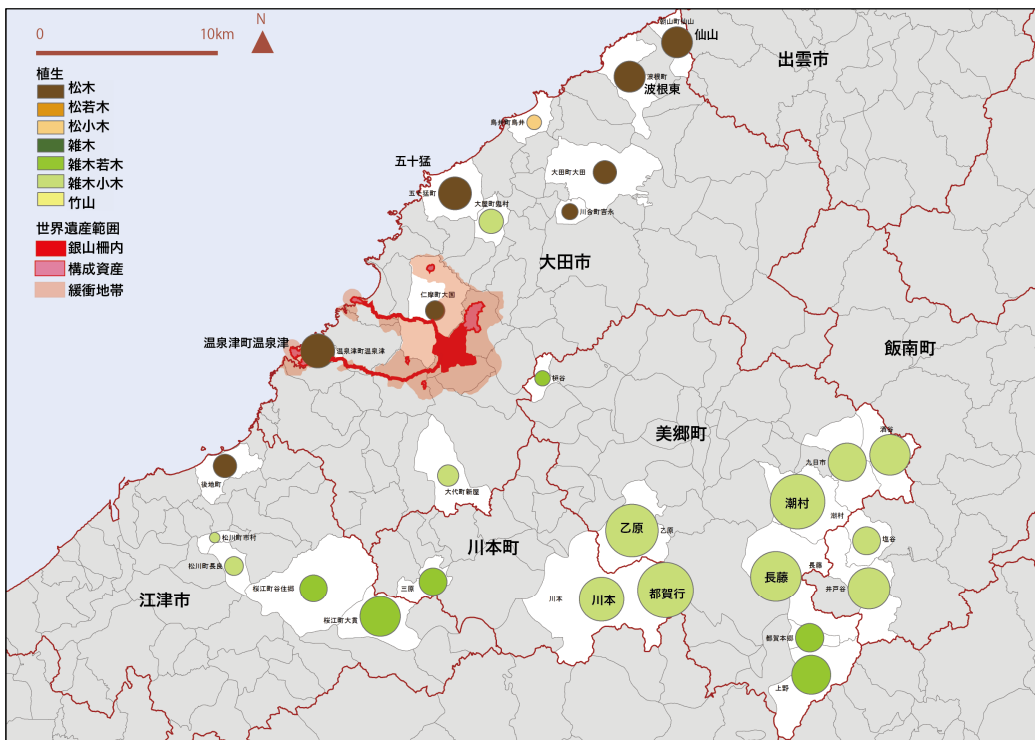
近世の石見銀山領の森林を「元禄十一年石見銀山料村々覚書」の記録に現在の字名と照合したものが図－2である<sup>注3)</sup>。銀山領には御立山と百姓持山があり，百姓持山はさらに林山，竹山，荊山，草山，草山入相山に分かれ，そのほかとして岩山役無が記されている。百姓持山は個人所有のものと入相山があり，伐採が規制されることはなかったとされている（島根県内務部 1916, 12-13）。林山は高木のある森林，草山は肥料のためのススキなどと考えられ，草山入相山は採草共有地である（佐竹 2012, 143）。荊山については不明だが，記載の順番からも，林山と草山の間，中低木が主の柴山のようなものと考えられる。それぞれの項目の合計は表－4の通りである。御立山は全体の約26%で，百姓持山のうち林山はわずか9%，草山と草山入相山をあわせると全体の約57%であり，石見銀山領の半分以上が草地であったことがわかる。

分布を見ると，全体に現在の三瓶町周辺の内陸部に林山が多いことがわかる。最も面積が大きいのは都賀行（邑智郡川本町）で1,275haあり，約8割にあたる1,035haは御立山である。百姓持山の面積が最も大きいのは吾郷（邑智郡三郷町）で1,029haである。林山の面積が最も大きいのは畑田（飯石郡飯南町）で150.8ha，次は都賀行で97.3haである。林山がないのは上津井（江津市松川町上津井），横道（大田市温泉津町福田<sup>注4)</sup>）である。

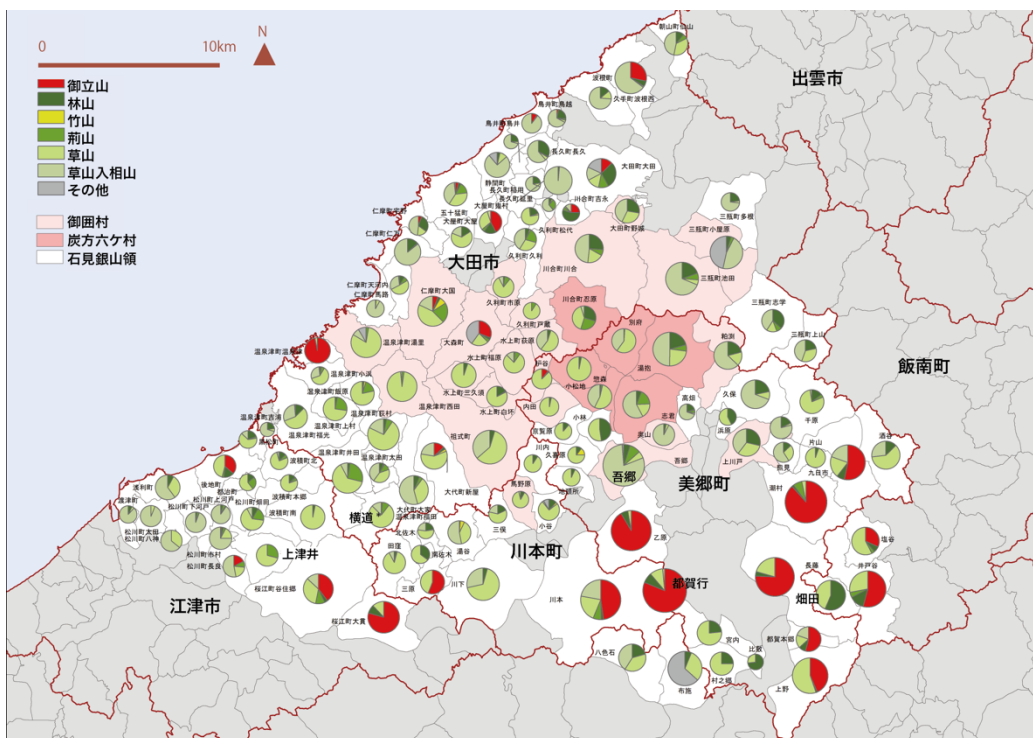
#### （3）御立山（図－1）

##### 1) 分布と利用

図－1は御立山の分布である。御立山は幕府直轄の山のことである。石見銀山領内



「銀山古事覚書」山中家文書，仲野義文（2009）『銀山社会の解明』清文堂，p. 132 より作成  
図－1 銀山柵内の位置および御立山の植生



「元禄十一年石見銀山料 村々覚書」より作成  
大田市の一部，美郷町，川本町の灰色はデータがない部分  
図－2 御囲村，炭方六ヶ村の位置および石見銀山領の植生

表－４ 御立山と百姓持山の面積

|    | 御立山    | 百姓持山   |        |        |       |        |      |         | 合計      |
|----|--------|--------|--------|--------|-------|--------|------|---------|---------|
|    |        | 草山     | 草山入相山  | 林山     | 荊山    | 岩山無役ほか | 竹山   | 小計      |         |
| ha | 5753.2 | 6931.4 | 5676.2 | 2049.0 | 900.0 | 786.1  | 75.3 | 16418.0 | 22171.2 |
| %  | 25.9   | 31.3   | 25.6   | 9.2    | 4.1   | 3.5    | 0.3  | 74.1    | 100.0   |

波多野虎雄（1986）：元禄十一年石見銀山料 村々覚書：郷土石見第 16・19, 21・24, 26, 37, 39, 41, 46 号より

表－５ 御立山の植生

|       | 松      |       |       |        | 雑木    |         |        |         | 竹山    | 合計      |
|-------|--------|-------|-------|--------|-------|---------|--------|---------|-------|---------|
|       | 松木     | 松若木   | 松小木   | 小計     | 雑木    | 雑木小木    | 雑木若木   | 小計      |       |         |
| 面積(町) | 673.2  | 2.9   | 4.9   | 681.0  | 2.0   | 4,970.8 | 910.6  | 5,883.4 | 7.0   | 6,571.4 |
| %     | 10.24% | 0.04% | 0.07% | 10.36% | 0.03% | 75.64%  | 13.86% | 89.53%  | 0.11% | 100.00% |

「銀山古事覚書」山中家文書，仲野義文（2009）『銀山社会の解明』清文堂，p.132 より作成

39 村 89 カ所が指定され（仲野 2009, 131-132），雑木，雑木若木，雑木小木，松，松若木，松小木，竹山の 7 種類に分けて把握された。御立山は 6,571 ha の 9 割が雑木，1 割がマツだった（表－5）。このうち，最も多いのは「雑木小木」76%，2 番目が「雑木若木」14%，3 番目が松木 10% となっている。また，「雑木」は 89 カ所中，五十猛 1 カ所しか記載がないことから 9 割の山で薪炭利用のための伐採が進んでいたと考えられる（佐竹 2012, 140-143）。

銀山領の御立山は松林と雑木立運上山の 2 種類だった。分布を見ると、海岸沿いは松で、内陸部は雑木若木，雑木小木となっている。

### 2) 雑木立

もっとも広い御立山は都賀行で 8 カ所の御立山の合計 1,043.5ha，ほか広い順に潮村，乙原，長藤，川本と 5 番目までがすべて内陸の現在の邑智郡である。

運上炭の記録を見ると，元禄 17（1702）年には 12 カ所 660 駄，1 カ所あたり平均 55 駄であるのに対し（仲野 2009, 134），それから 100 年もたたない 1760 年前後の記録では，25 カ所で年間 375.5 駄，1 カ所あたり平均 15 駄になっている（仲野 2009, 138）。文書の目的も異なるため安易な比較はできないものの，後者の備考として「毛上無」など木が十分育っていないことを示す記述が 25 カ所中 10 カ所と約 4 割を占めることから，多くの御立山で伐採が進み立木が枯渇していたことがわかる（仲野 2009, 137-138, 佐竹 2012, 140-143）。

### 3) 松林

御立山の沿岸部は松であり，もっとも多いのは温泉津の 146.9ha，五十猛 126.5ha，波根東，仙山のそれぞれ約 100ha となっている。松林は防風と土砂の流出防止のために繁殖させるもので，井堰や橋梁の修繕の用材も枯損木以外の伐採は禁止されていた。また，雑木立は主に製鉄業を営む者に貸与し，賃料を支払う代わりに伐採に許可は不要だったとされている（島根県内務部 1916, 12-13）。マツが主であった温泉津の御立山は港の保護を目的とした保安林の役割を担っていたとも言える。17 世紀初頭には温泉津周辺のマツを伐採したことを叱責する文書も残されており，早い時期から山林の囲い込みがあったと考えられている（島根県教育委員会 2006）。

元文 3（1738）年の御林改によると，温泉津町の御林には目通り 1 尺（30cm）から 1 丈 2 尺（3.6m）まで，長さ 1 間（約 1.8m）より 9 間（約 29m）までのマツ 3,957 本が記録されている。目通り 9 尺（2.7m）以上の大きな木は温泉津山に 42 本，鶴丸山 4 本であり，マツは雑木と異なり巨木が存在していたことがわかる（温泉津町誌編さん委員会 1995, 235, 温泉津町誌編さん委員会 1996, 92-93）。

また，温泉津には 18 世紀初期に陶器の製法が伝わり，釜が開かれたと考えられている。近世末（1840 年代）から近代初期（1900 年代）にかけて，瓦，日用雑器の生産が盛んになり，水などを入れる甕である「はんど」は東北や瀬戸内海にも売られた。こうした陶器



を焼く登り窯にはマツの割木が使用され、窯業が盛んになり登り窯が大型化するのに伴い、松割木の需要が拡大した。嘉永7(1854)年の文書には飯原坂の上から温泉津・小浜の瓦場まで、松割木一束一五五文で出荷することを条件に、茂右衛門所有の山林伐採を認める内容が記載されている(温泉津町誌編さん委員会 1994, 316-326)。銀の生産が下降した時期には窯業へのマツの利用があったことがわかる。

#### (4) 御囲村

銀山では邇摩郡12ヶ村、邑智郡14ヶ村、安濃郡6ヶ村の32ヶ村が御囲村として設定されていた(図一2)。御囲村は間歩や製錬に使用する留木、焼木、渡木を銀山に供出する村である。すでに述べたように、留木に使う切張は、長さ5尺7寸(172cm)の丸太が基本で、供出する量を定めるために表-3のように一駄あたりの大きさ、太さが細かく設定されていた。幕末の記録によると<sup>注5)</sup>、32ヶ村で1年間にクリの切張約1,200駄、焼木2,400-2,500駄、渡木350駄が割り当てられていた。膨大な量のクリ材が必要とされていたことがわかる。また、木材だけではなく縄や銀鉱石を入れて運ぶ吠(ダツ)など稲藁などでつくる資材も同様に御囲村から供出された(江面 1979, 232-234)。

#### (5) 炭方六ヶ村

18世紀中頃には炭が不足したため、御囲村のうち6ヶ村(別府村、志君村、惣森村、小松地村、湯抱村、忍原村)が特に特別に炭方として指定された(図一2、温泉津町誌編さん委員会 1995, 143)。慶長9(1604)年には初代奉行の大久保長安が近郷の山林を調べさせる書状が残っている(村上ほか 1978)。「千野所」に灰吹屋が建設され、そこで使用する炭を調達するために調査が行われたと考えられている。その翌年、慶長10(1605)年には3月から12月までの間に炭10,115俵、山松247俵、小枝4,471ふしを益田、三隅から温泉津に運んだ記録が残っている(表-1)(温泉津町誌編さん委員会 1995, 80)<sup>注6)</sup>。これらのことから、すでにこの時代に外部から燃料を調達しなければならないほど近隣の山林は伐り尽くされていたと考えられる。200年以上後の安政7(1860)年に忍原村では年間20駄が銀山に供出されており、近世の終わりまで炭の供給が続いていた(仲野 2009, 143)。

### 5. おわりに

石見銀山領では多くの植物資源が利用されてきた。近世において柵内ではマツ、タケ、周辺地域ではクリ材と炭焼き用の広葉樹、マツなどの利用に関する記録に残っている。特にクリは膨大な量が使われており、17世紀初頭から立木の枯渇がはじまっていた。御立山が薪炭や資材供給のための場所であり沿岸部の松を除くと高木が少なかったこと、銀山領の過半が草地だったことから、近世の銀山の周辺では高木が密集する森林はほとんどなかったと考えられる。銀山で使用する植物資源を供給する石見銀山領では内陸部の一部に高木があるのみだったが、マツは沿岸部の御立山に巨木があったことが明らかになった。

世界遺産では植物資源の持続可能な循環利用が評価されたとも言われているが、実際には銀山の発展にともなう急激な収奪によって草地と疎林が広がっていたと考えられる。現在の石見銀山周辺の森林は竹の繁茂や森林の荒廃など多くの課題を抱えている。銀の採掘や製錬には欠かせない植物資源の利用と当時の景観を一部で伝えながら、適切に森林を管理する必要がある。

### 6. 謝辞

本研究は科学研究費補助金15K07823の助成を受けたものです。

### 7. 注

注1) 本研究では波多野虎雄が『郷土石見』(第16・19, 21・24, 26, 37, 39, 41, 46号)に発表した史料をもとにデータベースを作成した。邑智郡川本町川本の本三上家所蔵の史料を波多野が書き写し、『郷土石見』に発表したものである。「元禄十一年石見銀山料 村々覚書」という表題も波多野が仮に付したものである(波多野虎雄(1986):元禄十一年石見銀山料 村々覚書:郷土石見第16号, 73)。波多野による

と、元禄十年は石見銀山料の村々に巨額の山年貢が課せられ、本史料はその出来事に関係して作成され、村によって記載の精粗が見られるという（波多野虎雄（1986）：元禄十一年石見銀山料 村々覚書：郷土石見第 22 号，88-89）。本研究ではこのデータを用いて相対的な森林景観の把握やおおまかな地域の分布を確認することは可能であると判断した。なお、この史料は仲野がデータを表にまとめているほか（仲野 2007）、佐竹が引用し、組ごとのグラフを示しているが（佐竹 2012）、村ごとの地図上の分布を表した研究はない。

- 注 2) 二千本（島根県（1965）：新修島根県史 史料篇 3 近世下：報光社，64-65）と三千本（高橋家蔵「石見国銀山麓絵図」，島根県文化財愛護協会（1986）：石見銀山関連資料関連遺跡分布調査報告，石見銀山資料館（2007）：資料でみる石見銀山の歴史，28）の記録がある。
- 注 3) 現在の字名と村名を照合し，GIS に入力して表示した。村ごとの面積の差が大きい場合図中の円の大きさは相対的な大きさの違いを表示することとし，面積の平方根で示した。なお，飛び地である津和野町日原は距離が離れているため本研究からは除外した。
- 注 4) 現在の温泉津町福田は横道，殿，福田の 3 村から構成されているため図—2 では林山があるが，横道村には林山がない。
- 注 5) 「石見国石州御料村々廻状順録」（中原家文書）（島根県 1965，140）安政 2 年（1855）という年代は島根県 HP  
<[http://www.pref.shimane.lg.jp/life/bunka/bunkazai/ginzan/survey/survey\\_03.html](http://www.pref.shimane.lg.jp/life/bunka/bunkazai/ginzan/survey/survey_03.html)>，2018.4.19 参照
- 注 6) 「ミスミ ます田ヨリ参御炭請取帳（慶長 10 年）」より計算（温泉津町誌編さん委員会（1995），80）

## 8. 引用文献

[著書，論文]

- 井上雅仁（2010）：石見銀山の植生環境：世界遺産石見銀山遺跡の研究 1，44-46
- 井上雅仁（2011）：石見銀山と周辺地域における近世の植生と土地利用：石見銀山遺跡テーマ別調査研究報告書 1，62-68
- 江面龍雄（1979）：石見銀山と周辺農村：山陰-地域の歴史的な性格：雄山閣，232-234
- 佐竹昭（2012）：近世瀬戸内の環境史：吉川弘文館，140-143
- 島根県（1965）：新修島根県史史料篇 3 近世下
- 島根県教育委員会（2006）：石見銀山歴史文献調査報告書 II，82-83，90
- 島根県教育委員会（2015）：石見銀山歴史文献調査報告書 11，65-66）「銀山古城山，〔銀山惣廻り垣松之事〕」「延享四年銀山覚書」
- 島根県内務部（1916）：島根縣之林業，12-13
- 島根県文化財愛護協会（1998）：菅谷鑪（再復刻版），26-28
- 仲野義文（2005）：近世期石見銀山における生産資材の調達とそのシステム：古代文化研究 13，43-53
- 仲野義文（2007）：石見銀山とたたら製鉄を支えた里山の環境歴史学：全国雑木林会議石見銀山大会大会報告，9-25
- 仲野義文（2009）：銀山社会の解明：清文堂，129-146
- 波多野虎雄（1986）：元禄十一年石見銀山料 村々覚書：郷土石見第 16 - 19，21 - 24，26，37，39，41，46 号
- 村上直ほか（1978）：江戸幕府石見銀山史料：雄山閣，97-100
- 温泉津町誌編さん委員会（1994）：温泉津町誌上巻：ぎょうせい，316-326
- 温泉津町誌編さん委員会（1995）：温泉津町誌中巻：ぎょうせい，235，
- 温泉津町誌編さん委員会（1996）：温泉津町誌別巻：ぎょうせい，92-93
- 若槻真治（2014）：石見銀山の街道と柵列に関する基礎歴考（後編）：島根県教育委員会・大田市教育委員会編：世界遺産石見銀山遺跡の調査研究 4，53-82
- ICOMOS（2007）：Advisory Body Evaluation, Iwami Ginzan Silver Mine (Japan) No 1246, 46-54

[ウェブサイト]

島根県，石見銀山遺跡とその文化的景観ホームページ

<<http://ginzan.city.ohda.lg.jp/wh/jp/area/index.html>>, 2018.4.19 参照

日本（2006）：世界遺産条約 世界遺産一覧表記載推薦書 石見銀山遺跡とその文化的景観，世界遺産推薦書ホームページ

<<http://bunka.nii.ac.jp/suisensyo/iwamiginzan/start-j.html>>, 2018.4.19 参照

文化庁：石見銀山遺跡とその文化的景観，国指定文化財等データベース，

<<https://kunishitei.bunka.go.jp/bsys/buildinglist.asp>>, 2018.4.19 参照

著者連絡先

（著者連絡先）

氏名：黒田 乃生

住所：〒305-8574 茨城県つくば市天王台1-1-1 筑波大学芸術系

Email：kuroda@heritage.tsukuba.ac.jp

（2019年5月16日 作成）